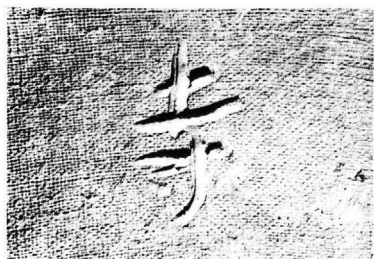


古

代



「寺」 籠書きのある布目瓦

一、豪族の誕生と古墳

四世紀になると、地方色の濃い弥生式土器に替り、無文で、全国的に齊一性の強い土師器が作られるようになる。これとともに、各地に高塚式の大きな墓が築かれる。これは、鉄器の普及や農業技術の向上などを背景として、各地に誕生した豪族の墓であり、古墳と呼ばれている。

古墳時代は、前期(四世紀)、中期(五世紀)、後期(六〜七世紀)に分けられる。古墳には、円墳・方墳・前方後円墳などがあり、ときには墳丘に埴輪がめぐらされる。内部には、木棺・石棺・石室などが作られ、遺体とともに銅鏡・剣・直刀・勾玉・管玉・馬具などの副葬品が納められており、当時の文化を示す貴重な資料となっている。

矢吹町内の古墳は、阿武隈川流域と泉川沿岸に集中し、なかでも谷中・鬼穴古墳群は、埴輪の存在と巨大な石室などから阿武隈川沿岸を支配する強力な権力者の存在を推測させる。

谷中古墳群

阿武隈川の氾濫原、三城目字谷中の細地に、三個の石室が点在している。矢吹町教育委員会では、昭和四十四年七月谷中古墳群の1号墳の発掘を実施した。石室は、羨道・玄室の全長九メートルの横穴式石室であり、天井石は三×三メートルもの大きな石が使用されていた。石室を

中心に半径二〇メートルの範囲から、円筒埴輪・形象埴輪の破片が発見され、石室内からは鉄製の破片二点と耳飾一点が発見された。調査による出土品は少なかったが、石室の規模、使用された巨大な石などから、三城目周辺を支配した強大な権力者の墓であったと推測される。



耳飾
(銅に金メッキ)



谷中古墳群 1号墳発掘状況

鬼穴古墳群

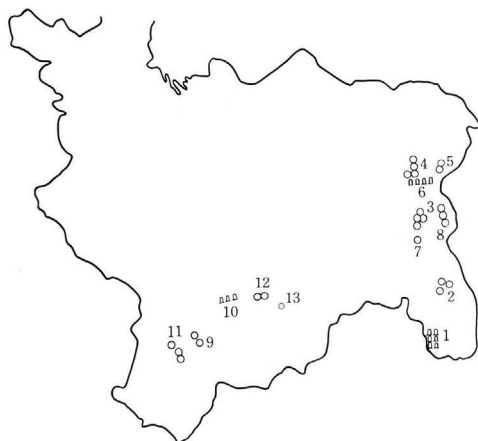
谷中古墳群の西方数百メートルの丘陵上に、四基ほどの古墳がみられる。1号墳は、墳丘の裾と墳頂が削り取られているが、現況で直経二七メートル、高さ四二メートルと測定される。すでに明治時代には横穴式石室が開口していたが、谷中古墳群1号墳調査と同時に清掃調査した。石室は、主軸がほぼ南北をなし、最大幅二・三六メートル、長さ八・八四



鬼穴1号古墳

メートル、高さ一九五メートルの大規模なものであった。墳丘裾からは、円筒埴輪・形象埴輪の破片が発見され、石室内からは鉄鏃十数点、靱尻一点、切羽一点、裏土一点などが発見された。時期を明確にする遺物が少なく、時期は不明であるが、谷中1号墳同様、強大な権力者の墓であったと推測される。

主なる古墳分布図



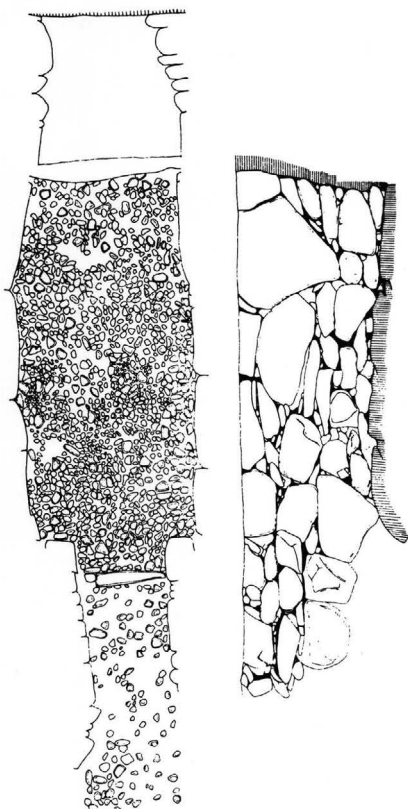
分布図の番号は
次頁の古墳地名
表の番号と一致
する。



鬼穴古墳群 第1号墳

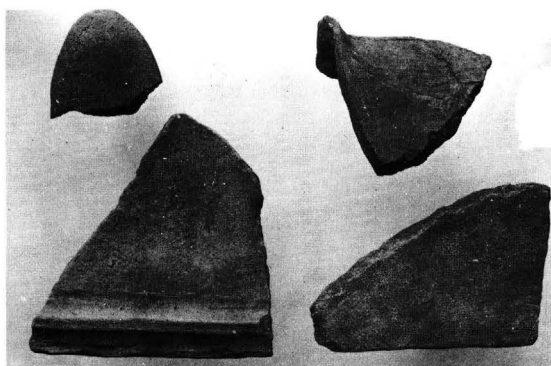
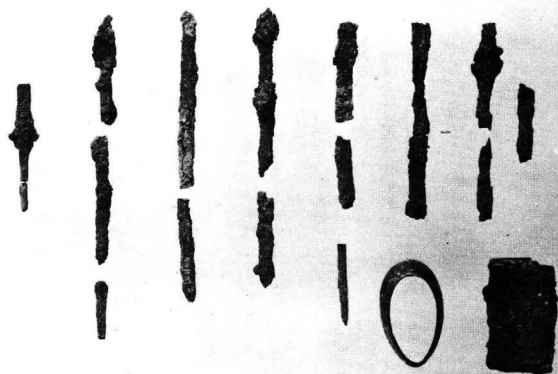
主要古墳地名表

古墳地名	所在地	出土遺物	備考
① 沼和久横穴古墳群	明新字沼和久		
② 甲三ツ段古墳群(円墳)	明新字甲三ツ段		
③ 鬼穴古墳群(円墳)	神田字神田東	埴輪・鉄鏃・刀子	二基あり
④ 弘法山古墳群(円墳)	三城目字弘法山		四基あり
⑤ 塚ノ越古墳群(円墳)	三城目字塚ノ越	石棺	
⑥ 久当山横穴古墳群	三城目字久当山	石棺	石棺・古墳多数あったらしい
⑦ 塚原古墳(前方後円墳)	中野目字塚原	直刀・人骨	
⑧ 谷中古墳群(円墳)	三城目字谷中	埴輪・金環	一基破壊
⑨ 寺山古墳(円墳)	中畑字寺山		一基あり。一基は破壊
⑩ 館ノ越横穴古墳群	中畑字館の越		
⑪ 清水塚古墳群(円墳)	松倉字清水塚		
⑫ 下荒具古墳群(円墳)	中畑字下荒具		
⑬ 大隈遺跡	中畑字大隈	曲玉	古墳と考えられる。破壊



鬼穴古墳群第1号石室実測図

鍬・鞘尻・その他
(鬼穴一号墳)



形象
埴輪

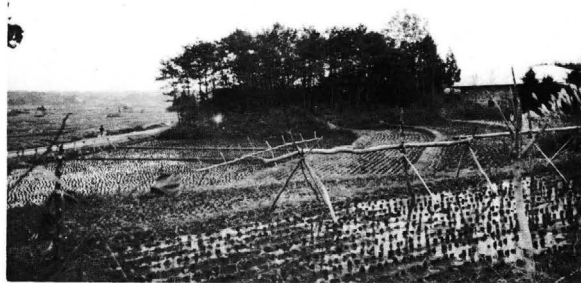
(鬼穴一号墳)



円筒
埴輪

(鬼穴一号墳)

直
刀
(塚ノ越古墳出土)



塚原古墳全景

塚原古墳

中野目字塚原地内にあり、前方後円墳と推定されるもので、第二次大戦後の県道拡張の際、後円部の一部が削り取られた。昭和十三年ころ、後円部の頂上から組合式石棺が二基発見された。その一基は、幅一メートル弱、長さ二メートル、深さ三〇センチ。他の一基は、幅五〇センチ、長さ一メートル、深さ二〇センチほどであったと伝えられている。また、ここから約五〇〇メートルの地内には、神田の白髭神社・琴平神社などが、阿武隈川氾濫原の水田地帯に浮島のように点在しており、古墳跡とも考えられる。

塚ノ越古墳群

『人類学雑誌』に「塚の腰という地、古墳累々たり」とあり、明治時代には、三〇基以上の古墳が存在したといわれている。昭和三十五年、当地区の遺跡分布調査をした円谷亀重の調査カードによると「阿武隈川北岸に近き畑中にあり、幾年か前に発掘した事あり」とある。現在そのほとんどは、水田となり、畑地として残ったわずかなところに、そのおまかげをとめているにすぎない。



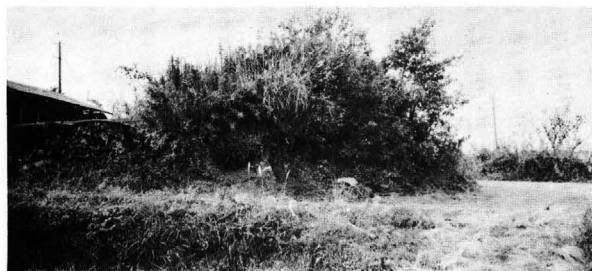
塚ノ越古墳

甲三ツ段古墳群

中野目部落を過ぎて間もなく、県道石川線の南側に見える古墳群で、明新字甲三ツ段地内に、約一〇メートル間隔で三角形に配置されている。いずれも直径一〇メートル以下の小さな規模である。



甲三ツ段古墳群 1号墳



甲三ツ段古墳群 2号墳



甲三ツ段古墳群 3号墳

弘法山古墳群

神田から奉行塚・弘法山にかけて、道路わきに、高さ一・二メートルの小円墳が三〇余基点在している。一部はすでに発掘あるいは破壊されている。円筒地輪が出土しているといわれている。



弘法山古墳群 (弘法山地内)

清水塚・寺山古墳群

松倉部落の北側、背後の山林の中に、三基の古墳がある。直径は一〇・二〇メートル、高さは約二メートルのもので、北東から南西に約三〇メートルの間隔で並んでいる。また、ここから約五〇メートル北東に、寺山古墳がある。二基とも山上にある。一基はかなり以前に盗掘されたもので、玉石が散乱し、掘りかえされた穴が無残である。



弘法山古墳群 (奉行塚地内)



清水塚古墳(松倉)

大隈遺跡

大隈遺跡（原宿地内）や坦山遺跡（寺内地内）などの坦、つまり塚は、直径約八〇メートル以上もあって、自然の山をそのまま古墳にした観があるが、古墳であるかどうかは



大隈森全景（左）



土製曲玉
（大隈周辺採集）



曲玉
（大隈出土）

わからない。しかし、大隈からは、ヒスイと思われる曲玉や、土製の曲玉などがみつかっており、それらしく思われる。

下荒具古墳群

下荒具B遺跡（土師集落跡）の東、約二〇〇メートルのところ、水田をはさんだ台地上にある二基の円墳からなっている。
泉川の南側の沿岸に位置している。古墳時代最終末期のものと考えられる。泉川沿岸遺跡とのかかわりの深い古墳として、注目に値するものである。



下荒具古墳群（中畑）

横穴古墳

七世紀ころから、山腹の急斜面に横穴を掘って墓とすることが盛んに行われた。これを横穴古墳と呼んでいる。横穴古墳がなく、小円墳群を残している地方もある。これらの古墳は追葬が行われ、一部は八世紀にくだることもある。このころになると、古墳の被葬者の身分的な幅が広がったと考えられる。矢吹町に近接する泉崎横穴は、石室内に朱で人物・渦卷文・三角文などが描かれ、東北地方で最初に発見された装飾横穴古墳として知られている。矢吹町地内からは、装飾横穴古墳は発見されていないが、久当山横穴古墳群・館ノ越横穴古墳群・沼和久横穴古墳群などが知られ、また『人類学雑誌』には、「『明新村の逢隈川に臨める岸腹に横穴多く見ゆ』との記録もみられる。

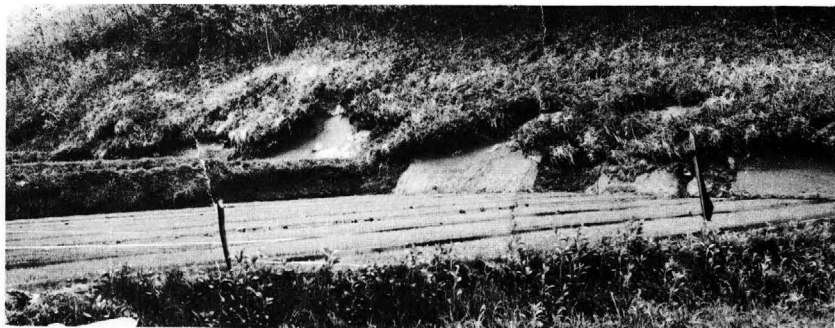
古墳の築造は、仏教の普及などにより衰退し、九世紀以降はほとんどみられなくなる。



直 刀 館ノ越横穴古墳群出土
(昭和29年10月 人骨3体とともに発見された)



久当山横穴古墳群



沼和久横穴古墳群遠景

二、奈良・平安時代の遺跡

大化改新以後、東北地方には陸奥・出羽の二国が設置され、それぞれに郡郷が置かれて開拓が進められた。当時の道路は阿武隈川の西岸に設けられたといわれている。福島県内には東山道の八カ所の駅と東海道から東山道に入る一カ所の計九カ所の駅があったと伝えられている。東山道は中路で、駅には馬一〇頭の駅馬を常備したといわれている。県内では、白河に入って雄野・松田・磐瀬・葦屋・安達・湯日・岑越・伊達の八駅があったことは『延喜式』に記されている。これらの駅は、土師器が多く発見される遺跡の集中している地域にあったといわれる。

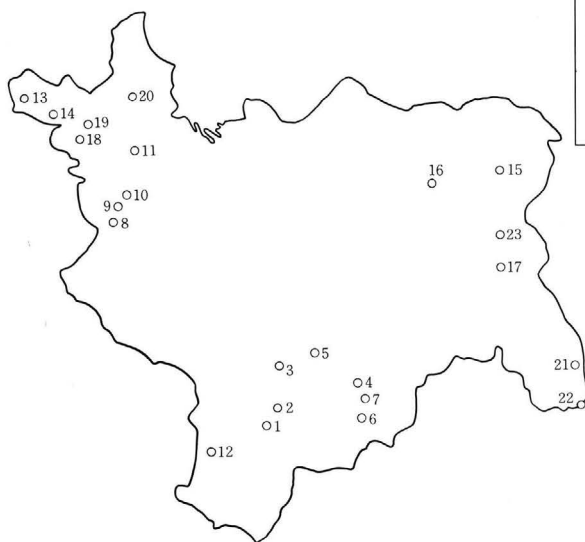
近年、矢吹町が行なった遺跡の発掘調査によって「王」「人上」「千万」「千万」「利万」「固」など、多様な墨書土器が泉川沿岸の各遺跡から発見された。これらの文化は、九世紀を中心とするもので、中畑の外にこれに関連のある遺跡として、大和久の狐石からも墨書土器が発見されている。このことから『和名抄』に記録されている白川郡の郷名の松戸郷は、現在の矢吹町全域に当たっていることが考えられる。また『義経記』に陸奥鎮守府將軍源頼義は安倍貞任を「ゆきがた原」に攻め、貞任軍は

打負けて、安積の沼に引退くたとある。これによると「行方原」は矢吹原を総称したようである。

このように古代矢吹地方の中心は中畑地区にあったことが考えられ、これに関連のある遺跡は明新地内の乙江沢、神田地内の岡の内遺跡、谷中地内の谷中古墳、三城目地内の吉作遺跡、えぞ穴横穴古墳・古館遺跡、中畑地内の行馬・下荒具B・国神、松倉地内の寺山、大和久地内の狐石遺跡、田内地内の芹沢遺跡・北の内遺跡、柿之内地内の上ノ原遺跡などである。これから考えると、古代の矢吹地方は、白川郡の一方の中心地であったようである。

発掘調査によって発見された土器その他の資料によれば、下荒具B、森郭・太子堂・寺山などは、白川軍団の有力な部隊の駐屯地であったようである。これらの軍勢力を保つための、強力な軍事工場と考えられる遺跡として、寺山遺跡・下荒具B遺跡などから発見されており、矢吹地方は陸奥鎮守府の工業地帯として、古代には栄えていたことを考古学は明らかにして、今日我々の目の前に数多くの資料を提供してくれた。

奈良・平安時代の遺跡分布図





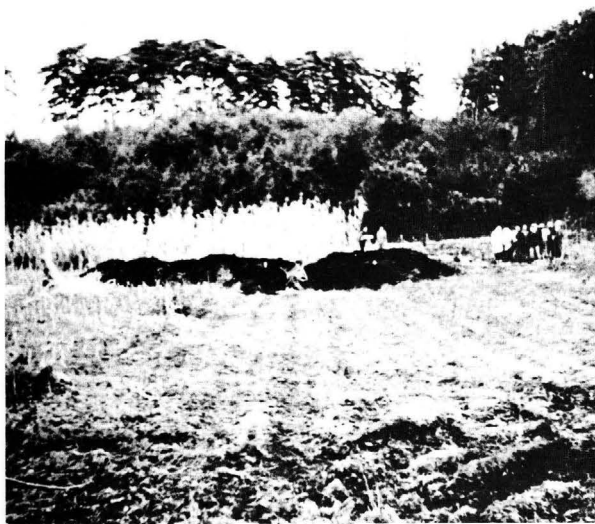
中畑の中央を流れる泉川

奈良・平安時代に先進的役割をになった泉川流域

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	序号
遺吉 跡作	遺辰 跡作	遺乙 跡作	遺土 跡作	遺山 跡作	遺管 跡作	遺岡 跡作	遺本 跡作	遺古 跡作	遺北 跡作	遺芹 跡作	遺新 跡作	遺孤 跡作	遺井 跡作	遺塚 跡作	遺三 跡作	遺國 跡作	遺中 跡作	遺下 跡作	遺森 跡作	遺行 跡作	遺太 跡作	遺寺 跡作	名 稱
三字 城吉 吉作	字明 屋新 敷前	字明 乙新 江沢	字林 上之 ノ内 原	字宏 和目 久平	字宏 和目 久平	字鶴 岡ノ 内	字二 城城 目細	字三 城古 目細	字之 北田	字之 芹沢	字松 新島 原	字和 氣石	字和 久戸 尻	字大 塚ノ 久上	字大 和久 森	字中 國神	字中 國中	字中 國中	字中 國中	字中 國中	字中 國中	字松 倉久 保	所 在 地
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	土 師 聚布 地	墨 土師 住居 跡	"	土 師 聚居 跡	住 居跡 、土 師 聚	曲 土土 製	瓦 窯跡 、土 師 聚	土 師 聚 住居 跡	土 師 刀土 助跡	土 師 聚	土 師 聚	工 房跡 、土 師 聚	遺 物
畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	畑	山 林	畑	桑 畑	畑	畑	畑	畑	畑	地 目
												45 6 5 6 5	45 6 5 7 7	45 6 5 7 7	45 6 5 7 7	45 6 5 7 7	45 6 5 7 7	48 3 1 1	48 3 1 10	47 12 23	46 3 20	45 12 15	備 考

寺 山 遺 跡

松倉地区にあり、泉川の河岸段丘である。南東斜面にあつて、寺山からの沢に面している。発掘調査によつて、製鉄遺構および小鍛冶工房と、それに伴う住居跡が発見された。ここで特記されることは、工房跡のピットから発見された黒書土器群である。「千万」「利万」「人上」「一千万」などが確認された。



寺山遺跡全景

寺山遺跡工房跡 1、たたら跡 2、臼 3、砂鉄の入ったピット





寺山遺跡工房跡ビット内より



寺山遺跡出土坏墨書「人上」



寺山遺跡出土坏「千万」



寺山遺跡工房跡出土坏
「利万」墨書



「壬申」と読める墨書

太子堂遺跡

寺山の北、泉川西岸の河岸段丘にあって、太子堂の旧跡といわれる。発掘調査は実施されなかったが、工事が終わった畑から土師器の坏が発見された。これに墨書銘があり「壬申」と記されている。

太子堂遺跡の遠景





中畑根宿の行馬遺跡全景 観音山を望む

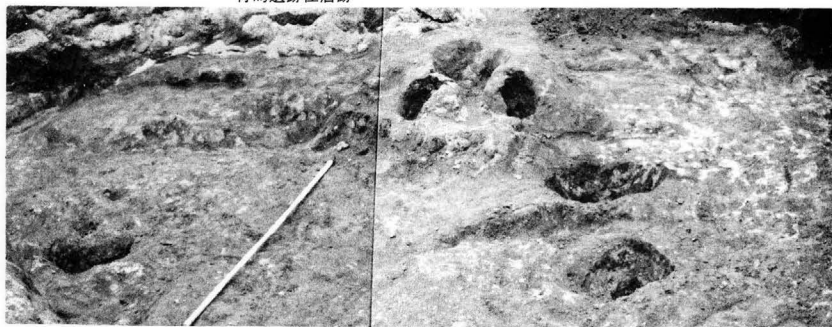
行馬遺跡 円形遺跡周濠の中から高坏が出土している



行馬遺跡

根宿の北に広がった遺跡である。奈良時代前期で、「かまと」に芯材として長瓶を使用した住居跡が発見された。ここからは長頸瓶・土管形土器・高坏・壺などの遺物が出土した。観音山にある館の腰横穴に葬られた豪族などに関係があると考えられる。

行馬遺跡住居跡



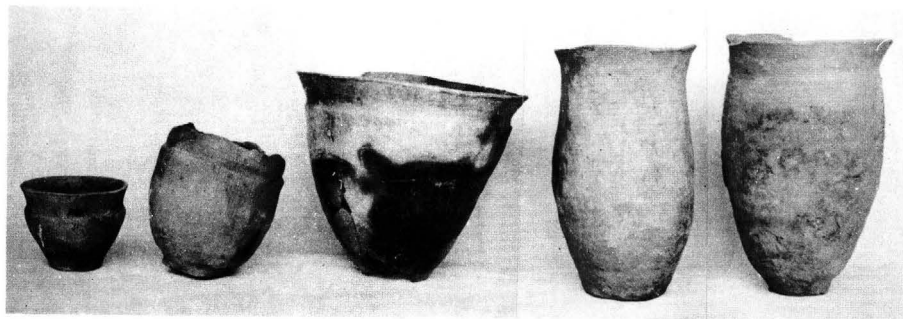


かまどの中に据えられた煮沸用長甕

土器一式（坏, 皿） 行馬遺跡から出土

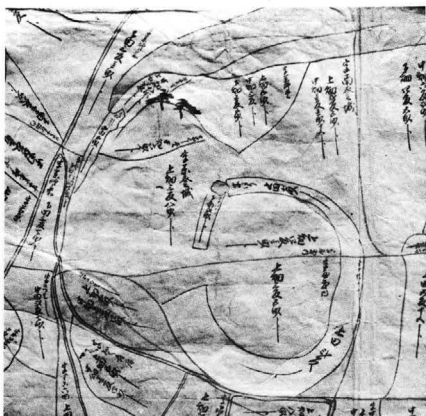


出土土器（壺, 瓶, 長甕）



森郭遺跡

原宿から北にはり出した舌状台地で、五〇〇平方メートルの広さである。この遺跡は奈良時代から平安時代にかけての「たち」と考えられる。中心部に一〇メートル四方の住居跡を中心として、四メートルの小形住居跡が数基発見された。ここからは直刀などが出土しているところから、軍団との関係が考えられる。

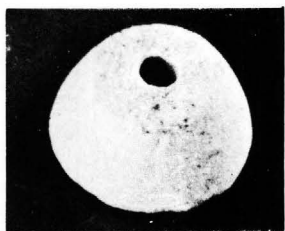
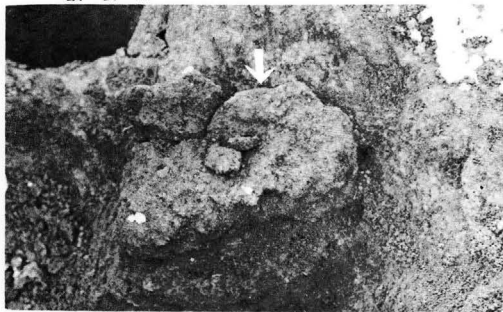


近世森郭附近の地図



森郭1号住居

鉄製鍋



紡錘車



森郭2号住居

刀子
2号住居から出土



森郭1号住居出土の土器
左から 坏, 燈火器, 甕



森郭3号住居



下荒具B1号住居跡

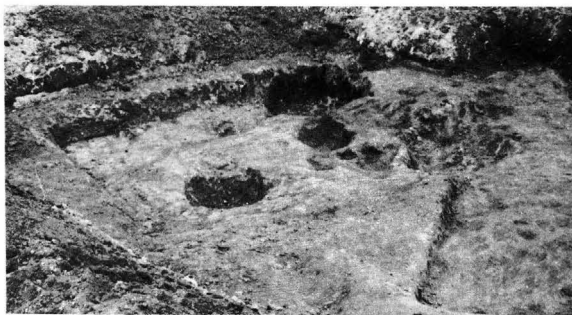
I号住居北側かまど

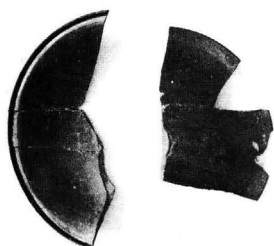


下荒具B遺跡

泉川の南岸に広がる古代の遺跡で、白川軍団の関連が考えられる遺跡である。この遺跡は、製鉄工房とその後の住居跡との複合遺跡で、製鉄工房からは鉄製品が多く、軍団兵士用の「提砥」が発見されている。住居跡からは「王」「団」の墨書銘の土師器が出土した。

下荒具B2号住居跡





光耀のある黒色をした土器蓋(フタ)
1号住居から出土

「王」墨書銘土器 4号住居跡から出土
1号住居から「国」の墨書、「因」の範書
きの土器が出土した。

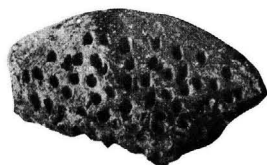


須恵器長くび壺(高さ8センチ)
4号住居跡から出土した



木製坏
ロクロを使用して作られ
たものと考えられる。

甌(こしき)の底部
4号住居から出土



左が4号住居 右が3号住居が切り合っている。



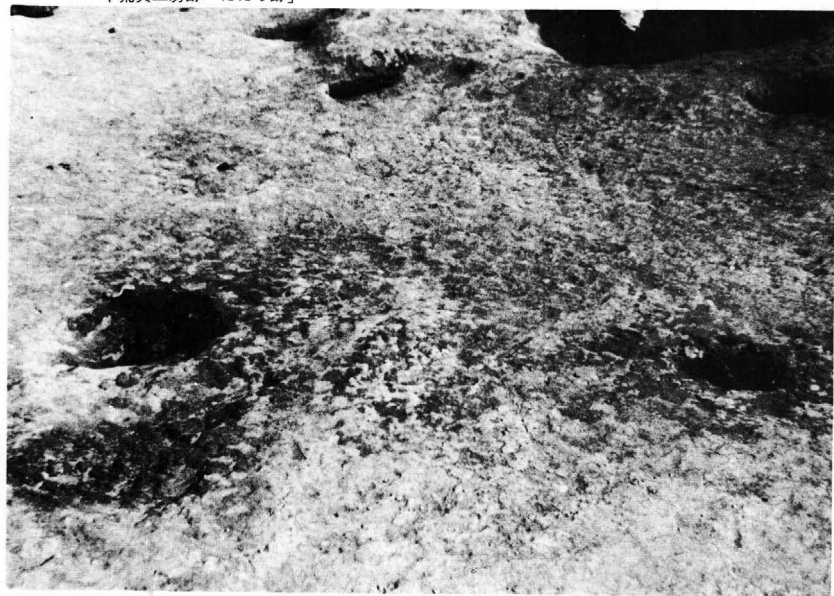


製鉄工房（たたら）跡
左ビットから提砥が出土した。

下げ砥



下荒具工房跡「たたら跡」

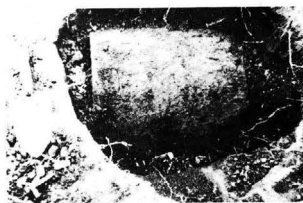


かに沢遺跡

中畑地区原宿の東に当り、かに沢池の下に広がる水田に北面して、発見された三基の瓦窯跡である。この窯で作業をした工人の住居跡も発見され、ここでは銅を製精した地塼が出土している。瓦溜は住居に接したところにあった。ここから発見された瓦は、奈良時代中期のものと考えられる重弧文軒平瓦をはじめ、「寺」の簀がきものなどから、関和久・借宿遺跡との関連が深い。



かに沢瓦窯跡

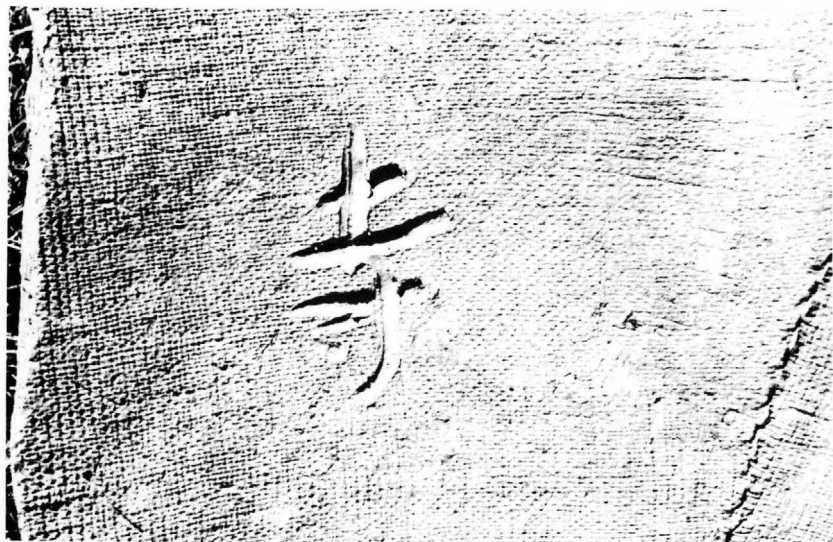


布目瓦

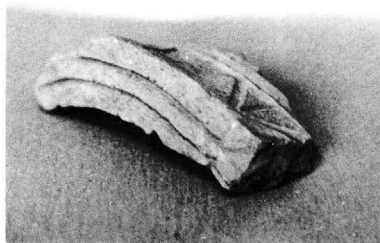
煙出しにふせた状態で出土した。

かに沢瓦窯跡全景



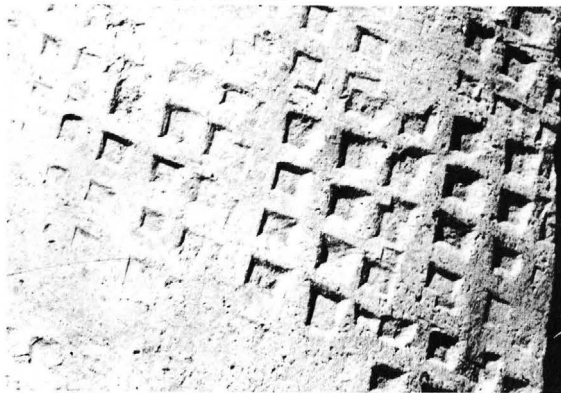


「寺」 籠書きのある布目瓦



重弧文軒平瓦

格子たたき目紋



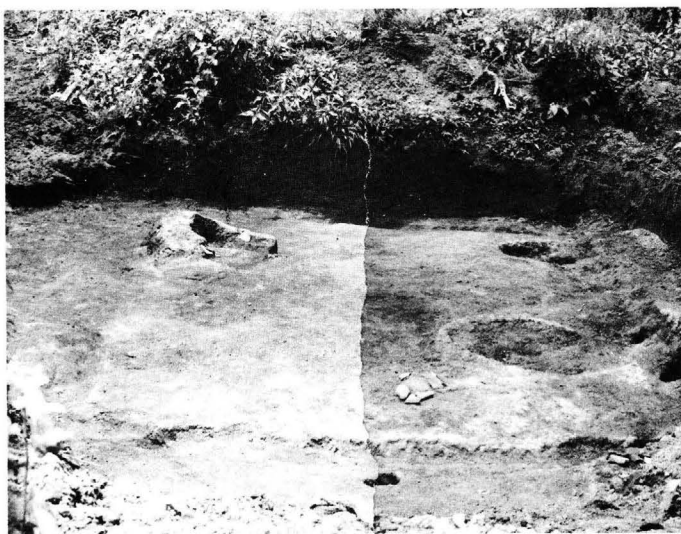


瓦 だ め



かに沢住居跡出土土器

かに沢住居跡
かに沢瓦窯に働く工人たちの住居と考えられる。



国神遺跡

国神は、中世に中畑氏の居館が置かれたと伝えられている館跡である。館が築かれた以前は、古代の集落があり、調査によって、住居跡が発見された。この東には、大きな作業場があり、土製勾玉をはじめ祭祀に使用したと考えられる小形土器が出土した。

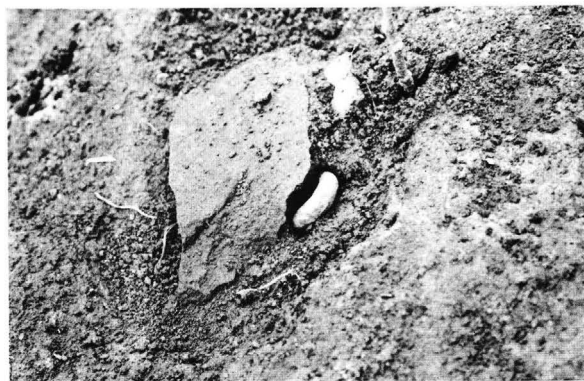


国神遺跡遠景

国神遺跡2号住居(作業場)跡



国神遺跡1号住居跡



土製曲玉出土状況

土製の曲玉



祭祀に使用したと思われる土器

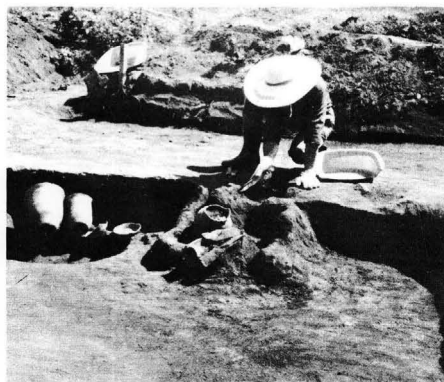


国 神 館 跡

国神館は、中世には中畑氏が居館したと伝えられる。写真は本丸跡である。昭和四十八年四月一日に町指定史跡となった。

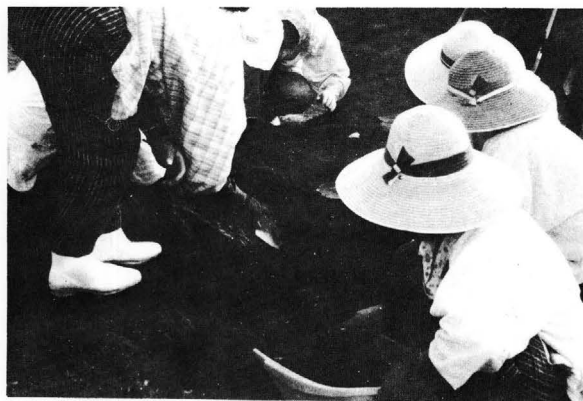
三峯森遺跡

奥羽山脈、権太倉山から流れる隈戸川の河岸段丘にある遺跡で、水田から一〇メートルの高さである。住居跡は一棟で、丸底坪・壺・長甕・甌などが発見された。奈良時代、矢吹地方の一連の遺跡である。



三峯森遺跡のカマド跡
甌(こしき)杯、壺、長甕
などがセットで出土した。

三峯森遺跡の住居跡



三峯森遺跡発掘作業状況

堰ノ上遺跡

館山の東斜面の中腹にある。住居跡が二基で、甕・壺・坏などから考えて、奈良末期から平安前期にかけての遺跡である。

堰ノ上遺跡の住居跡

狐石遺跡

狐石は隈戸川西岸の傾斜地の遺跡で、舌状地上に住居跡が四基発見された。ここから水田に下る斜面に、住居跡を囲む形に柱穴が発見されたこの柱穴群は、この集落を取り囲む柵列と考えられる。この住居跡からも「家」の墨書土器が発見されている。



狐石遺跡の住居跡、その外側にある柱穴と、貯蔵に用いたビット。



東北縦貫道関係埋蔵文化財発掘調査に協力された方々。

